

地域、異世代、異年齢との関係を生かした教育活動 1

— 道徳性の育成を視点とした検討 —

*Education Making Use of Relationships with the Area, the Different Generation,
the Different Age 1*

— Consideration Based on Moral Education —

安部 孝 *Takashi Abe*

(人間発達学部)

【キーワード】

道徳教育 地域社会 異世代・異年齢 学校教育 中川小

1 課題意識

本研究では、地域や異世代、異年齢との関係を生かした教育活動について、南陽市立中川小学校¹⁾(以下、中川小)の教育実践を道徳性の育成(本研究では、自主・自立に焦点化する)という視点からとらえ、その意味や在り方について考察する。

中川小では、地域に根差し、地域の特色や、地域や家庭との連携を生かした様々な教育活動を行っている。小規模校であり、一部、複式学級を展開しているが、子どもたちにとっては縦割りの活動や全校活動など、異年齢のかかわりを通して学ぶ機会がある。それゆえ、かかわり(方)が学年やクラスで完結した学習環境とは異なり、全体的には固定化された集団ではあるが、内側に開かれた環境を生かして、考え方や学び方が育まれていると考えられる。また、地域社会や家庭との連携における人とかかわりという意味においても、「地域一家庭におけるかかわり」の「学校一学年一学級における人間関係」に対する影響は強いものであると考えられる。

そこで、中川小の地域的特色やそれらに規定される教育経営の特色に目を向け、「自主・自立」²⁾を育てる意味を明らかにしつつ、その具体的な手立てとしての取り組みを取り上げて考察したいと考える³⁾。

2 方法

南陽市立中川小学校における「教育目標」等(『学校経営概要』による)や校長先生へ

1) 山形県南陽市立中川小学校(平成29年度 校長:山口芳弘先生)

2) 「自主・自立」は、本稿で、「3 内容」において、中川小の教育目標や教育観を地域とかかわりとの関係で精査した結果、焦点化され、抽出された一つ価値であり、以降の実践の検討に際しての手掛かりとなるものである。

3) 本稿は、「平成29年度 名古屋芸術大学特別研究」として、研究助成を得て取り組んだ「地域、異世代、異年齢、生活文化との関係を核とした教育活動の構築1—具体的な活動への着目・調査・意味付け—」の内容の一部を、表題のテーマにとらえ直し、新たな考察を加えるものである。また、研究の成果として報告するものである。

の聴取、観察を通して、教育観にかかわる道德教育の重点を洗い出し、その育成の機会としての特色を生かした教育活動（お年寄り訪問、全校話し合い活動）の意味について考察する。

※なお、本稿における中川小の事例や様子は、あくまで、既に実践されている事柄を著者が考察の手掛かりとするに限って引用し、参考とさせていただいたものであり、本考察は、中川小の実践に働き掛けたり、批判や評価をしたりするものではない。日常の貴重な実践を、著者が自身の研究の意図に沿って、道德教育研究の視点で見取り、考察することをご理解いただいたものであり、考察や見解の内容における責任は著者にある。

3 内容（概要）

3-1 教育観

(1) 子ども観と教育観

「平成29年度 中川小学校の教育」の全体は、図1のとおりであり、そこには、学校の特徴を表す表現がいくつか見られる。ここでは、特に「めざす学校像」と「中川小の目標」を取り上げ、「子ども観」と「教育観」をとらえていきたい。

a) 「〈めざす学校像〉小さいけれど、キラリと輝く学校『一人一人が伸びる、一人一人を伸ばす、中川の小学校』」

b) 「中川小の目標 自分に自信を持ち、たくましく生きぬく力の育成」

a) は、学校教育目標へのアプローチを図る学校の理念といえるが、スローガンの表現の中に、子ども像（「一人一人が伸びる」）が示されている。また、b) は、「小中9年間の目標：『自主・自立』（自ら考え、進んでやりとげる子どもの育成）」にアプローチするものである。それは9年間の内の6年間を担い、中学校（学区が広がる）での教育を見通すことで示した一貫性ある姿（子どもの資質・能力）であり、小学校における常なる姿である。そこでは、「一人一人が伸びる」や「自分に自信を持ち」など、子ども一人一人に関する、また相依する価値が示されており、その意味で、子どもが「自信を持って生活し、行動する」ことをもって、「伸びる」ととらえていることになるのだと考える。

また、「南陽市学校教育の目標」、「『激動の21世紀社会を自ら切り拓き、たくましく生きぬく子どもたちの育成』」の重点として、「地域総合型教育を推進し、信頼される学校をつくる」が示され、その細目に「『確かな学力』の育成 ・『愛郷心・愛校心』の醸成 ・『生きがい・働きがい』の創造」が掲げられている。これらはまさに、前述の「中川小の目標 自分に自信を持ち、たくましく生きぬく力の育成」と直結するものである。

そして、それらをより焦点化し、具体化した「最後までやり抜く力」「自尊心・自己有用感」「自分を表現する力」「ふるさとを愛する心」は、子どもの資質や能力といえるものである。それらは、教育において独自に追求されたり育成されたりするというよりも、

平成29年度 中川小学校の教育



図1 中川小学校の教育／『学校経営概要』より

教育的な取り組みや子ども像（育ってほしい姿）を追求する上での手掛かり（指針や方向性）であり、資質や能力としては相依的に働き、また、形成されるものであると考えられる。その意味で、通常、教育実践においては、それら（描かれたすべての資質や能力、姿）がすべて叶えられ、十全に具わった具体像を描くことは困難であり、むしろ、それら一つ一つが全体（像）の徴表（一側面であり特徴である）として、「経営の重点」に分かりやすく述べられていると理解する必要があるのだろう。つまりそれは、子どものある側面を生かして理想の姿を育てていく（目的的、また近接を図る）姿勢ともいえるのである。

したがって、示されたこの4つの項目・カテゴリーに、中川小が掲げる子ども観（育ってほしい）と教育観（育てたい）をとらえていきたいと考える。

(2) 「教育目標」としての「自主・自立」と「自立心」

前述の4つの項目・カテゴリー（「最後までやり抜く力」「自尊感情・自己有用感」「自分を表現する力」「ふるさとを愛する心」）は、「小中9年間の目標」にアプローチする「中川小の目標」で育てたい姿や、資質や能力であると理解した。そこで、「自信を持つ／たくましく生きぬく力」の育成とは、「最後までやり抜く力」「自尊感情・自己有用感」「自分を表現する力」「ふるさとを愛する心」の育成であるにとらえ、それらが「自主・自立」の資質や能力としてどのように理解されるのかを、以下に確認していきたい。

「小学校学習指導要領（平成20年）」（以下、「小学校要領」⁴⁾）には、「自主」について次のような記述がみられる。（下線は著者による。）

- 「(教育の目標)」「第二条」「二 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。」（「小学校要領」、p. 1）
- 「児童の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう……」（同、p. 4）

ここでは「自主」は、「自律」と共に「個人」における「精神」の問題としてとらえられ、心情や意欲と態度との関係で述べられている。

また、「自律」については、

- 「(3) 自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。」（同、p. 92）
- とあり、自由であることや、一方で責任を担える資質として理解されていると考えられる。

そして、「自立」については、次のような記述がみられる。

- 「教育基本法」「2 義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。」（同、p. II）
- 「同」「家庭教育」「第十条 父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする。」（同、p. III）
- 「生活」「第5節生活 第1 目標 具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」（同、p. 60）
- 「第3 指導計画の作成と内容の取扱い (3) 各学校においては、各学年を通じて自立心や自律性、自他の生命を尊重する心を育てることに配慮するとともに、児童の発達の段階や特性等を踏まえ、指導内容の重点化を図ること。」（同、p. 93）

4) 平成29年度の実践を検討するにあたって、当該年度の学習指導要領を使用した。

一般的に「自立」とは、「他の助けや支配なしに自分一人の力だけで物事を行うこと」であり、「ひとりだち。独立」することである⁵⁾。したがって、「自主」「自律」とのかかわりで理解するなら、自分を支えていくことについての責任ある態度とその裏付けとなる自分の在り方（考え、価値観、理念等）が育てられることが、教育の目標となる。この意味で、「自主・自立」が育てられることを「9年間」という計画性や見通しの中でとらえるなら、それは、到達を見据えた方向目標的であり、同時に、その時々要求される姿（そうであること・そのようであることが随時期待されること）であるといえる。このことは、先の記述にも読み取ることができる。つまり、小学校における「自立」とは、いずれ到達すべき「自立」の基礎⁶⁾であり、子どもの内面がそこに絶えず向かっている「自立心」である。ゆえに教育は、「自立」するように育てていくことであり、実際に育てているのは「自立」しようとする心や態度ということが出来る。したがって、子どもの心を自立へと向かうように誘うこと——「自立心」の喚起と涵養を図る指導のあり方についての検討が求められるといえよう。

(3) 4つの項目・カテゴリーの中の「ふるさとを愛する心」について

さて、道徳性を育てる教育活動を地域や異世代、異年齢との関係に着目して検討するにあたって、先述の4つのカテゴリーを整理、集約することで、視点の明確化を図り、手掛かりにしたいと考える。

「最後までやり抜く力」「自尊感情・自己有用感」「自分を表現する力」は、「自分に自信を持ち、たくましく生きぬく力」にそのまま通じ、集約されると考えられる。しかし、「ふるさとを愛する心」はこれらとは異なり、「自分に自信を持ち、たくましく生きぬく力」と結びつくような意味付けを行う必要がある。

そこで、検討の手掛かりとして、「〈経営の重点〉」に示された、同様の、また、似通った意味と表現である「5. 地域や家庭と連携し、ふるさとを愛する心を育てる」「6. 安全で安心な学校づくりに努める」を引きながら、「自分に自信を持ち、たくましく生きぬく力」へとアプローチを試みたい。(引用中の a)、b) の表記、並びに下線は、著者による。)

「5. 地域や家庭と連携し、ふるさとを愛する心を育てる」

「①地域活動への積極的な参加や『ふるさと学習活動』により、a) 地域を知り、地域を元気にする態度を育てる。」

「②**b) 子どもの自立**につなぐ PTA と連携した取り組みを推進する。」

「③子どもの **c) 豊かな情操の育成**、学力向上につながる地域や保護者による学校サポート体制を推進する。」

5) 「大辞林 第三版の解説」<https://kotobank.jp/word/2018.1030>.

6) この「自立」が、“小学生なり”のという、段階的な意味合い（性格）を持つものか、それにかかわる大人による判断（恣意）なのか、そしてその基準とは何かについては本稿では言及しない。

「6. 安全で安心な学校づくりに努める」

「① d) 『自らの命は自ら守る』という意識を高める安全教育、防災教育を推進する。」

「② e) 未然防止につなぐ定期的な安全点検と速やかな改善に取り組む。」

「5.」については、学校教育の範疇での教育活動やPTAなど家庭や地域を巻き込んだ取り組みが示されている。こうした中で子どもの姿が示されるとき、そこに大人の願いや具体的な活動の展開が理解（イメージ）される必要があり、それを踏まえた学校教育の意味の理解が必要となる。

「5. -①」[a] 地域を知り、地域を元気にする態度」は、子ども自身のことであるが、その姿は、著者が観察したお年寄りのお宅への訪問などの実践に見られた⁷⁾。学校とそこ（学校、地域）に生活する子どもが、積極的に直接的なかかわりを構築し、なおかつ地域の人間関係と学校の地域性や役割を明確にしつつ（立場を踏まえながら）、一層活発化していく取り組みは、まさにそうした姿 (a) であるといえよう。

「同」[② b) 子どもの自立につなぐ][③子どもの c) 豊かな情操の育成]は、前述のように教師や大人がそのように子どもを育てるという考えや営みであるから、そうした中で子どもの姿を見取ること確認できるものとする（到達への途上であるが、常にその態度や内面を見取り、支援している）。

例えば、お年寄りのお宅を訪問する際には、交通の便などの事情も考慮し、支援する保護者の取り組みがある。子どもが何かをやり遂げるための支援は、決してその主体性や自主性を弱め、削ぐものではない。むしろ、それは結果的にやり遂げることを叶え、そうするために大人や子どもはどのように生きなければならないかを、子ども自身がかわりの中で学ぶ機会を与えるものである。困難な生活（行動）条件下では他者の力を積極的に借り、その力に気付くことは、地域に生きる大人に対する理解であり、同時に、自分の生き方やこれからの“生きていき方”⁸⁾についての理解といえるのである⁹⁾。

「③子どもの c) 豊かな情操の育成」については、たとえば、子どもがある場面や事象に対したとき、どのように受け止め、考え、心持ちを抱くのかについて、大人は何らかのあり方を考え、望んでいると思われる。だが、子どもの内面の当初の状態（心が動く）を大人が決め、そのように誘導することはできない。そして、大人の意図を窺わせることは教育の企図に過ぎず、むしろ情操を育成することを逸脱することにほかならない。その意味で、大人の期待を明かしながら、子どもの抱いた心持ちの共有やそれに対する理解を図る場面が必要になると考える。そしてそれは、子どもが自分の「情操」をどのように理解し、表現し得るのかを明確にすることを、大人に対して常に要求するものである¹⁰⁾。

7) 「100歳こえても元気でね」については後で述べる。

8) そうするという生き方から、そうしていく、そうし続けていくという意味が含まれると考える。

9) 自立と主体性の基本概念と、その具体的な姿、子どもや地域の特殊性について多様に考える必要がある。

10) 「情操」を育てるとは、また表現するとは何かという問いが立ち上がる。教育は情操に何を求めている

そして、「6.安全で安心な学校づくりに努める」の「①d『自らの命は自ら守る』」は、日常生活の中で「命」を意識していくということにはかならず、まず自分にかかる責任存在としての自己を認識することが求められているといえる。この姿は、そのまま「自主・自立」を表すものといえるが、具体的な活動において子どもが抱く意識や、それを誘う大人の方法やその評価（子どもの内面に対する成果）の考え方などは一様にはとらえがたく、「自らの命は自ら守る」ことについての知識や理解、または方法などを多面的に追求する必要がある。

「②e 未然防止」への大人の取り組みは子どもにはなかなか分かりにくい。なぜなら、現実的に起こさないことと起こらないことは、事象として知覚できないからである。したがって認識の対象を変え、自分で自分を守る（前項d）前提としての「守られている自分」を理解する機会を設けることが必要となると考えられる¹¹⁾。このように考えると、子どもにとって、大人や地域に守られていることの自覚と、その自分をさらに自分で大事にしながら生き抜くことこそが、目指されている姿であり、目標に叶う姿であるといえる。とするならば、子どもがそれを実際に知り、実感し、そのことを積み上げ、身に付けていく場面として、地域社会や大人（異年齢、異世代）とのかかわりが必要となり、学校教育においても活用されることが必要であると考え¹²⁾。

3-2 訪問・観察を通しての考察

以下、学習活動を道徳性の育成の機会として検討する。まず(1)では、教育活動を展開し、同時にそれらの背景ともなる中川小についての概要を、そして、(2)では、実際の活動について述べる¹³⁾。

(1) 中川小について

平成29年度の訪問・観察（同年5月2日(火)）で得た、中川小についての概要（情報）を整理する。

るのか、また、家族や地域社会は子どもの情操や内面に何を期待しているのかを考える必要がある。この場合、情操が言語化され、共有化されようとしたときに、不一致や表現不可能などの状態が生じることが前提（共通理解）とされなければならないだろう。それは、例えば、学校における「自主・自立」などにかかわる感情や態度と、家庭や地域でのそれが、必ずしも一致し得るかという事実に目を向けることでもある。

- 11) 子どもが、自分が負う責任（意識）を育成する段階にあっては、育成者がその責任を包摂的に負うことになる。したがって、自分を守る（自分に守られる）ことは、具体的に他者に守られていることを理解することによって学び得るのだと考える。
- 12) 子どもが自分の存在をどのように説明し得るか。その原初なる立ち位置と、そこから描かれる諸々の関係性を、身近な、また具体的な人間や諸事象等を手掛かりにつかませていくことが必要と考える。
- 13) 本研究の成果発表を行った「日本道徳教育学会 第91回大会／『道徳性を育む教育活動についての考察1—学校の実態に沿い、生かす取り組みへの着目—』（平成30年7月1日、文京学院大学）における発表資料（発表内容）を引用する。この内容は、山口校長先生からのご助言および、「経営概要」に基づき、また参照したものである。

①聴取等から

山口校長先生より教育の経営、実情、実践について説明を受ける。先生方に挨拶し、研究の趣旨を伝え、協力への理解を得る。

中川小は小規模校であり、中学区が広域で、同小学校区に中学校はないこと。そうした背景で異年齢・異世代交流はある意味で止む得ない場面であること。今日的な社会的要求（学力比較の数値化・可視化など）で成果を示しにくいこともあるなど、実情を伺った。

同校は、他校（南陽市立赤湯小学校、同荻小学校）との交流活動で、岩部観音（現在はコンサートなど地域イベントも開催）と草木塔を紹介し合う郷土学習や、地域のお年寄り宅への訪問、学校行事への招待などを行っており、地域の環境を学習資源として生かした活動が、まさに地域での生活と一体化している希有な教育環境である。

②補説（『平成29年度 学校経営概要』等から）

a) 地域や家庭の環境について

明治6年、中山学校として創立。市の東部に位置し、四方山に囲まれた地域である。学区の中央を南北にJR奥羽本線が縦貫し、それに並行して国道13号線が延びている。同道を南北に走行する自動車の交通量は多いが、上山バイパスが開通し（平成22年）渋滞が緩和された。これらの環境は、児童の通学にも影響を与えている。また、3世代同居が多く、学校教育に対する関心も高く、協力的である。（図2参照）

b) 学級編成等について

平成14年度には102名の在籍で、平成23年度には59名となり、2・3学年が複式学級となった。以来、1～2の複式学級が編成され、平成29年度は49名が在籍し、3・4

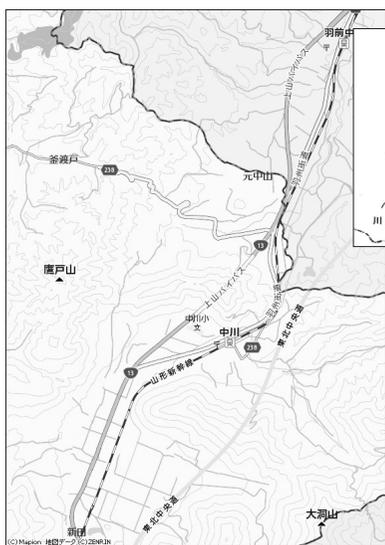


図2 中川小のある地域

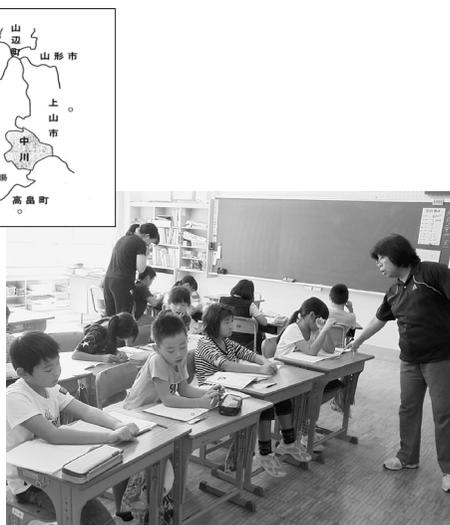


図3 複式学級の様子

学年が複式学級となっている¹⁴⁾。(図 3 参照)

c) 「経営の重点」(一部) について

- 「幼保小中一貫教育」の目標である「自主・自立」(自ら考え、進んでやりとげる子ども)の育成をめざし、本校としての課題を明確にして取り組んでいる。(赤湯小・中学校、児童館との連携・交流)
- 地域や家庭と連携し、ふるさとを愛する心を育てている。(地域活動への参加、地域を知り考える活動、PTA や家庭と連携した取り組みなど)

d) 「道徳教育の全体計画」における「道徳実践の日常化」について

「道徳実践の日常化」への道筋として「教育環境の整備/環境づくりへの児童の参加」、「豊かな体験/縦割り班活動、ボランティア活動ほか」(「地域・家庭・児童館・中学校との連携」が関係)が位置付けられている。

(2) 実際の活動について

①平成29年7月19日(水)

a) 「草木塔」について、子どもたちへの質問

3年生の子ども達に、「草木塔」¹⁵⁾について知っていることを質問した。由来、建立者やその思いは、他校との交流活動時の学習から理解していた。一部、「家の人も知っていたよ」という子どもの発言があった。

「草木塔」を質問事項として取り上げたのは、

- ・「草木塔」が、この地域に多く建立されたものであり、その思想的背景に「山川草木悉有仏性」という大乘仏教における一切の平等観や、自然物への供養の思いがあること。
- ・子どもたちが社会科見学(3年生)で同市内の荻小学校前に建立された「草木塔」を見学し、同校の教員によって説明を受けるなどしていること。

などから、地域にある事象から(それに、またそれに込められた)道徳的価値に気付き、それを感じる学習機会となっているのではないかと、考えたからである。(図4・図5参照)

14) 平成30年度。43名。2・3学年/4・5学年が複式。4学級編成。

15) 草木塔:「草木塔(そうもくとう)」とは、「草木塔」、「草木供養塔」、「草木供養経」、「山川草木悉皆成仏」などという碑文が刻まれている塔。素材は石で、部分的に研磨するなどの手を加えたものもあるが、ほとんどが採石された自然石の状態のままである。国内に160基以上の存在が確認されているが、建立されている地域は本州の一部に局限している。さらに草木塔の約9割は山形県内に分布し、4つの地方に分かれる山形県内でも、特に、置賜地方と呼ばれる地域に集中して存在する。最も古い草木塔は、江戸時代中期の安永9年(1780)に山形県米沢市大字入田沢字塩地平に建立されたものである。「草木塔とは? 山形大学における環境問題への取り組み」(<http://www.yamagata-u.ac.jp/html/YUEMS/special/somoku.html/2018>)参照。



図4 草木塔／南陽市立荻小学校前¹⁶⁾



図5 荻小学校前の草木塔の前で

b) 「100歳こえても元気でね」への参加

■ 「100歳こえても元気でね」（5校時／方面別一斉下校時）

8つの下校方面ごとに、「地域のお年寄りを訪問」することを通して、お年寄りとかかわり、元気付けるとともに、地域を知り、愛する気持ちを育てることをねらいとしている。子どもは知人宅であっても、事前学習を踏まえて行動していた。2、3回目の訪問（行事の案内）は親子で行う（地域・家庭との連携）予定となっていた。

お年寄り宅への訪問に参加・引率する。子どもは通学（帰路）途中にあるお年寄り宅を、通学班の仲間や担当の教師と一緒に訪ね、お手紙と学校行事の案内を手渡した。ランドセルには熊除けの鈴が付けられており、地域環境と、まさにそこでの生活（通学）の様子を知ることができた。私が参加した訪問戸数は、通学班の子どもの人数と同じくらいである（1班、6～7戸）。訪問に先駆けて、体育館で全体指導がなされ、次に班ごとの指導が行われた。お手紙や訪問宅リストなどの準備は、担当教員たちによってなされていた。

いずれ、子どもの数があつとわず減少し、一方でお年寄りの数が増え、同校が他校に統合されるようになったとき、この活動がどのように存続するのが課題としてあがっているという。

訪問における、印象的なエピソードを記す。

- ・訪ねたお宅で、玄関先に出て対応されたのは、当該者（お年寄り）の娘さんだった。当人は、施設に入所されているという。（これまでとの変化）
- ・訪ねたお宅で、返事は聞こえるが玄関まで出てこられるのには時間がかかった。姉妹（5年・3年）が訪ねたが、その子たちのおじいさんや、その子たちが生まれたことも聞いていたという。

その姉妹は「きれいになったね」と言われた。小学生が、近所の方にそう言って声を掛けられるなど、初めてのことではなかったかと思う。姉妹がどの家の孫かを説明

16) 場所：南陽市吉野荻 荻小学校内／建立日付：文政7年8月／碑名：草木供養塔／材質：花崗岩の加工石／サイズ：99×71×24cm。

し、話を取り持ったのは引率教員であった。教員が地域（及び、子どもたちの地域社会生活）にどのような役割を果たすのかを再確認した。

- ・寝間着姿で対応し、ご自身の様子を話された方もいた。ご自身も同校の卒業生だが、卒業以来、行ったことはないという。「嬉しいけれども、いつ行けるかな」。「もう行けないのではないかな」。「頑張るからね」。そう話された。（図6・図7参照）



図6 全体指導



図7 各班に分かれて訪問

②平成30年2月14日(水)

c) 「全校話し合い活動……かがやきタイム」(図12参照)

■「全校話し合い活動」(昼休みの時間帯)

「あいさつをしなかったらどんな弊害があるのかを考える」ことで、あいさつの大切さに気付かせ、あいさつをしようとする態度を育てることをねらいとしている。5・6年生の運営委員が進行し、縦割り班や全体での話し合い活動を行った。（図9参照）あいさつを学校のよさ（自慢）にしたいという思いを踏まえ、その大切さの確認に留まらず、「しなかったら」という逆の視点を与えていた。教師は、司会の指示やまとめに留意し、「わかるように」「伝わるように」行うようにと助言を与えていた。（図10参照）

「かがやきタイム」の参観。昼休みの活動で、縦割りをベースに全校活動として行われた。かつて同校で取り組んでいた「全校道徳」が、特別活動・縦割り活動として内容的に継承されている。特に、着目すべき内容を記す。

- ・縦割り班での話し合いでは、1年生も2年生も発表していた。発表の仕方や「考え方」、意見のやり取り、態度、そして雰囲気などをこうした中（活動を通して）で学んだり身に付けたりしていくのだと思った。

およそ教育（実践）の評価では、その中で考え・理解する、発表・表現する、操作・工夫すること（姿）などに着目し、見取るが、同校のように、まず普段のような関係や活動形態があつて、そこで課題や取り組みの内容や流れ、立場を変えることで新たな学びを展開することもあることに着目する必要があることが分かった。こうし



図8 全体での話し合い



図9 班ごとの話し合い



図10 進行役への助言



図11 かがやきタイム 計画/掲示

た学びの展開は、反復・習熟¹⁷⁾しながら、経験を積み上げるように学ぶ機会を作り出すと考えられた。(図8・図9参照)

- ・司会者(6年生)が全体の運営にあたり、下学年の全児童がそれを見ている(学んでいる)。運営に対する教師の指導は明快・的確で、年長者として1年生に(も)分かる表現、問い掛けを行うことに、配慮されていた。(図10・図11参照)

「あいさつ」を「全校」一斉の学習のテーマに取り上げている。あいさつすることを全体で学習し、そうすることが“当たり前”となっている。したがって、しないことは問題である(当たり前が自明の価値であれば、しないことは、それに対する抵抗、失念、無理解などの状態と考えられる)。したがって、いずれを考察するにせよ、どちらにも理由が

17) 反復・習熟それ自体は、同じように、もしくは同じ課題が繰り返されることであり、そこで学ぶことであるが、この実践の場合は、それが個人の中に完結されず、近い関係の変容の中で、自分の立場で為すべきことを心得ながら、それを為して行く姿が、状況的に生じている(育っている)といえよう。もしも、広範囲で大人数、多集団の状況ならば、こうした地域的、組織的な完結性が弱く(曖昧で)、仲間や関係性によって集団の行動様式やルールなどが変化し、自分の在り方への関心や意識もそれに応じて変容する(変えていく)と考えられる。

中川小の場合、集団で求められる子ども像や成長像はとらえやすく、そこを目指して辿りやすいと考えられる。こうした状況が多様性や、多様な経験を通した理解につながるのかは分からないが、多様性の中における価値ある一つの姿として、その集団を構成するそれぞれの年代に相応した資質や能力などの力量形成(しっかりと育てる)にはふさわしい、確かな環境と考えられる。

<p>全校道徳 平成 28 年 7 月 13 日 ※過程/抜粋 ※表現を一部変更</p> <p>○あいさつは<u>なぜ大切かを考えることを通して</u>、気持ちのよいあいさつを心がけて、誰に対しても明るく真心をもって接することができる。[礼儀]</p>	<p>全校話し合い活動（かがやきタイム） 平成 30 年 2 月 14 日 ※過程/抜粋 ※表現を一部変更</p> <p>○あいさつを<u>しなかったらどんな弊害があるのか</u>を 考えることを通して、なぜあいさつが大切なのか に気づき、あいさつをしていこうという態度を育てる。</p>
<p>学習活動</p>	<p>学習活動</p>
<p>つかむ</p> <p>1 学習課題をつかむ。 ○「あいさつの花をさかせよう」…これはどうする目標か。 ・<u>されると</u> ・気持ちがいい・嬉しい・元気になる ・触れ合いが生まれる ・コミュニケーション ・すると気持ちいい ・<u>しないと</u> ・いやな気持ちになる ・相手に失礼</p>	<p>つかむ</p> <p>1 学習課題について考えを持つ。 ○自分のあいさつに自信を持っているという人は手を挙げる。 ○もし、<u>あいさつをしなかったら</u>、どうなると思うか。 ・すっきりしない ・<u>無視されていやな気持ち</u> ・<u>雰囲気悪い学校だと思われる</u> ・みんなの仲が悪くなる</p>
<p>考え伝える</p> <p>2 学習課題について話し合う。 ○あいさつは何のためにするのか ◎<u>どんなあいさつだとするほうがされるほう</u>も気持ちがいいか ・元気がよい… ・目を合わせて。笑顔で… ・あいさつされたら返す… ・進んで。自然な…</p>	<p>考える</p> <p>2 学習課題について話し合う。 ○みんなの発表を聞いて、あいさつはどうして必要だと思うか。 ・相手を敬う気持ちを示す ・仲良くなる ・相手を大切に思う気持ちが表れる ・関わる力がつく ・心が通じる元気がよい ・自分も元気になる</p>
<p>まとめ</p> <p>3 今日の学習のまとめをする。 ○隣の人と気持ちのよいあいさつを試みる。 ○気持ちのよいあいさつができる人は、みんなの前でやってみる。</p>	<p>まとめ</p> <p>3 今日の話し合い活動について振り返る。 ○（話し合いをして）あいさつについてどのように考えが変わったか。 ・<u>相手を大切にすること</u>だと気付いた ○これから、あいさつをがんばりたいという気持ちになれた人は手を挙げる。</p>

図12 右/全校話し合い活動（かがやきタイム）の流れ（指導計画を参考に改変作成）

存在し、その意味やそれぞれが引き起こす状況などを確認する学習になる¹⁸⁾。ただし、この場合、しないこと（人）に対する最低限の理解の機会ともなるだろう。

実際の場面では、あいさつをする側とされる側それぞれの理由もとらえ方も異なるが、それでも、この場合“しない理由は無い”のだから、結局は、“する理由”を積極的に考えることに至るはずである。（無いことを考えたり、解答として提示したりすることは不可

18) すでに、「あいさつすることが当たり前」と思い、取り組んできている子どもたちにとって、理由を考えることにどのような意味があるのだろうか。むしろ考えることで、「自明」性を失ったり、変わったりすることはないだろうか。また、「大切」であることを再考することが、価値のとらえ直しやその間に実行しないであることを許すことにもなる。つまり、道徳的価値の意味を考え、検討することにおいて、意味のとらえ直しはあるが、子ども自身における価値観の変容をどう考えていくのか、今後の課題となる。そして、将来的に多様性に触れる場面が多いほどに、自己の抱く価値観の変容や心情的揺れが生じることが予想される。

能である）

だが、中川小の場合はこの課題（考察）の前提には、「中川小の自慢・誇り」、中川小生としての在り方についての認識が存在する¹⁹⁾。「誇り」とは生き方であり、それを自ら失うことはできないとするならば、通常考えられる安全やマナー等の理由と同様に、またそれ以上に「誇り」を守ることが“する理由”の根拠になるのだと考えられる。そして、それはこの課題であると同時に結論であり、したがってこの考察は、価値に自分を引き比べること（内省）にほかならないのだと考える。

4 さいごに

中川小における「自主・自立」を育てる教育活動を手掛かりに道徳性の育成について考察した。特に、地域とのかかわりや異年齢での学習活動の場面を取り上げ、検討を通して人間のかかわりや地域の働きを生かすことの意味を明らかにした。その結果、子どもが、“今ここで生きて、生かされている（守られている）”自分や周囲の働きに気付く教育の必要性が明らかになった。

子どもの資質や能力、情操は地域社会での経験が積み上げられて育まれるが、決して一様ではなく、とらえ難い。したがって大人は、子どもの姿に「自立心」を見取り、いずれ多様な価値観に触れるときに自信を持って生きていくように支援し続けなければならない。

子どもたちの姿には、互いを思いやり、それを実感していることが感じられた。また、地域で自然に取り組んでいる「あいさつ」は、学校の児童としての誇りとなっており、こうした生きるために必要な自信は日常、自然に育てられているのだと思う。つまり、子どもたちの道徳性の根本は地域の生活や習慣、共有される感情でつながっており、価値観やそれを持つ人間としての個々の生き方は内側に開かれた人間関係において涵養されているのである。したがって道徳教育の基本課題は、子どもたちの生活が根付いている具体的なかかわりをとらえて関与し、そこに通底していくことにあると考えられる。

地域社会の事情やそれに起因する状況に置かれた子どもが、自らその環境に大きな変化をもたらすことは困難である。そこには、自分にかかわる条件の変化によって起こり得ることや、一方で、変わらないものを見極める力が必要となるだろう。したがって、何を残

19) 中川小では、「あいさつ運動」に取り組んでいる。これは、中川小に始まり全国に広まったという『交通安全ありがとう』運動と大きく関係している。そしてこのことについての全校話し合い活動が、平成30年1月10日の「かがやきタイム」で行われている。授業の内容は、「あいさつ運動」は、中川小（の児童会）から始まった（子どもたちのお母さんたちが、ちょうど小学生のころ。約30年前）こと／そのきっかけとなること（横断歩道で止まってくれた車へのお礼の挨拶）が投書によって『山形新聞』に取り上げられたこと／このこと（運動）が山形県で広がり、全国に広がったこと／この活動は今も続いていて、中川小の誇りといえるものであること等について、考え、気付いていくというものであった。この出来事は、道徳的価値と道徳的価値観の形成を考える意味で深い意味を持つと考えられるが、本稿では言及しない。

して何を取り戻すかという根本的価値観と、それに基づく判断力を育てることが求められるのである。

道徳性は、人間の道徳的な生き方がその時、その社会で叶うことによって具現化（実践）すると考えられる。ならば、子どもが道徳的に生きていくために、様々な価値観が通底する土壌を地域社会という生活や文化の領域にとらえ、子どもがそこに存在し、展開する諸事象に道徳的価値を感じ取り、また、気づき、考え、そのように生きてみる経験を積み上げる機会を設けることが必要と考える。（了）

謝辞

本研究に取り組むにあたって、実践等の検討についてご理解くださり、また数度の訪問の折には、ご多用の中を懇切にご対応、ご指導をいただきました、南陽市立中川小学校の山口芳弘校長先生をはじめ、諸先生方、職員の皆様、児童の皆さんに心から感謝を申し上げます。

なお、本研究の一部を、日本道徳教育学会第91回大会（平成30年7月1日 文京学院大学）にて発表しました（「道徳性を育む教育活動についての考察1—学校の実態に沿い、生かす取り組みへの着目—」）が、その準備の折にも山口校長先生にはご指導、ご助言をいただきました。発表では、道徳性を育てることについて「新たな計画や問い」を立てることよりも「そこに生きる子どもたちの中にある道徳性の芽を感じ取り、それが培われた生活を検分し、その土壌である『具体的で個別的な』地域を活かし、働き掛け、なおかつ活かす取り組みの中で、自然に行われ得ること」が必要であるとし、それを「シンプルな道徳性の育み」とまとめることができました。重ねて、感謝申し上げます次第です。